

一九〇五年（明治三八）、東大に宗教学講座が開設され、最初の担任教授となった姉崎正治（一八七三—一九四九）博士は、前年に学位論文の『現身仏と法身仏』、五年あとの一九一〇年（明治四三）には『根本仏教』を刊行し、原始仏教の研究については、三十歳代半ばで、すでに一つの峯を築いていたということが出来る。その博士が、一九一二年（明治四五）に宗教学と印度哲学との同居の形ではあったが宗教学研究室ができてまもなく、研究雑誌「宗教研究」を出すことを考えた。そのさいに問題となつたことは、印度哲学と共同して出すか、別にするかという事であった。というのは、博士の自伝によると、

日本仏教の新たな研究方法

—— 思想的研究と学際的研究 ——

田村芳朗

「印度哲学と宗教学とはどうも氣風が合わない。即ち、印哲は始終、考証のような学問におち入って、は、えな」『わが生涯』一一八頁）からである。姉崎博士の危惧したことがらは、その後、ますます顕著となつていった。事実、今日にいたるまで、印度哲学ないし仏教学は、東大の印度哲学科を中心として、原典の言語学的研究と漢文文献を含めての考証学的研究に終始してきている。原典写本から漢文文献にいたるまで数多く存するところから、このような研究方法はおこるべくしておきたものであり、また基礎作業としては欠くべからざるものではあるが、そのあまり、欠落した研究方法がある。それは、

全体的立場からの思想的研究である。どの分野でもそうであるが、研究が専門的に深まりを増すにつれ、個別化し、自己分裂をおこすにいたっている。その典型が印度学仏教学で、いまや葉一枚の研究となり、枝を忘れ、幹を忘れ、根を忘れる結果となっている。最近、諸分野において、個別的研究を総括して全体的立場から見なおすことの必要がさげられるようになったが、まさに印度学仏教学界に、そのさびげが向けられねばならない。

加えて印度学仏教学に特に必要なことは、思想的研究である。仏教が考古学や文献学の対象でなく、人間の救いを問題とする宗教の一つであるかぎり、その思想的研究は必須のことがらといえよう。原典研究や文献考証が土台を築くことにたとえられるとすれば、その土台の上に住む家を建てるのが思想的研究である。実際は土台ばかりが厚くなって、一向に家が建たないのが、仏教学界の現状と評せよう。

ところで問題は、その思想的研究の方法である。たとえば比較思想の分野で、ハイデッガーをポツンと取りあげ、道元をポツンと取りあげて、両者を比較し、類似し

ているということでは両者を結びつけたりする研究が見うけられるが、これは、きわめて主観的であり、恣意的になる恐れがある。そうではなくて、まず、それぞれの背景をなす思想史の上のせて検討し、そのあとで両者を比較するというものでなければならぬ。仏教そのものについていえば、その思想的研究は思想史的研究ということになる。なお、思想史とは矛盾・対立の、いわば論争の歴史であって、したがって、始めも終わりも同じだとか、結構だとかということではなく、矛盾・対立の歴史を直視し、どういふ問題がおきたかを客観的に見きわめながら、仏教の思想や教理を研究していくのが、真の意味における仏教の思想的研究といえよう。

日本仏教を例にとれば、一応、宗学的研究が思想的研究にあたると思われるかもしれない。しかし、宗学とは、それぞれの宗派の祖師を絶対視し、それに批判の目を投ずることなく、その祖師から話をはじめるといふ形になっている。結局は護教学にすぎず、真の思想的研究とはいえないものである。宗学をして真の思想的研究たらしめるには、まず、祖師たちをインド以来のそれぞれ

の思想史の上のせて検討を加えることが必要である。研究態度についていえば、旺盛な問題意識と批判精神のもと、疑問を投げかけ、問題を掘りおこしながら、研究することである。

しかし、それだけでは、まだ十分ではない。少なくとも同時代に出た祖師たちについては、同じ土俵の上のせて比較研究することが必要である。思想史的研究と合わせていえば、まず祖師それぞれの思想史から検討を加え、ついで時代・社会・思潮などの共通背景から比較研究するということである。そうすることによって、祖師それぞれの特徴が、かえって浮き彫りにされよう。

道元と日蓮を例にとれば、道元は日本に曹洞禅をもたらした祖師ではあるが、道元の大著である『正法眼蔵』には法華経が最も多く引用されている。また、瀕死の重病におちいったとき、法華経・如来神力品第二十一の「若於園中、若於林中、……諸仏於此、而般涅槃」という有名な句を口に唱えながら部屋をめぐる歩き、唱え終つては、その部屋を妙法蓮華経庵と名づけたという。そういうわけで、道元は、個人的には法華信奉者であった

といつて、さしつかえなからう。いっぽう、当時の代表的な法華信奉者として、日蓮があげられる。そこで、道元と日蓮における法華信奉のありかた、法華引用の仕方というものを比較研究することが必要となってくる。現在のところは、道元は道元だけ、日蓮は日蓮だけで研究がなされているが、同じ法華信奉者として両者を比較研究することは、たいへん興味深いことがらであるし、また、かえって両者それぞれの特徴が明らかとなる。

日本では、祖師を仰いで宗派が厳然として存在しているために、それぞれの思想史の上から祖師たちにメスを加えたり、同じ土俵の上のせて比較したりすることはタブー視されているが、今後、そのような研究方法が採られることによって、新たな光が研究の上にさしきかると思われる。なお、同じ土俵の上のせて比較することは、仏教内における一種の学際的研究といえよう。

ところで、学際的研究の本来の意味は、仏教と仏教外との学際的研究ということである。これが、仏教、特に日本仏教に残された、いま一つの研究方法である。それに関して日本仏教ということばであるが、二つの受けと

めかたが考えられる。一つは、仏教というところに力点を置いた日本仏教であり、もう一つは、日本というところに力点を置いた日本仏教である。つまり、仏教が日本に入ってきて、伝統的な日本文化に与えた影響と、仏教が日本文化によって影響され、変容していくということのいずれに重心がかかっているかということである。一口でいえば、日本の仏教化と仏教の日本化の問題である。これは、いわば伝統的な日本文化と仏教との学際的研究ということになる。

その日本文化の中で、特に仏教と密接な関係を持ったものは、日本の文芸である。文芸作品の中に、しばしば仏教が取りこまれているゆえんである。そういうわけで、大きくは日本文化ということになるが、せめていえば、日本の文芸と仏教との学際的研究が必要となってくる。これについて思いおこすことは、本居宣長の『源氏物語』にたいする評釈である。ちなみに『源氏物語』は、もっぱら国文学者によってのみ研究がなされ、日本の仏教学者は、『源氏物語』を仏教の文献と同じようにテキストとして用い、日本仏教を研究するということはな

った。近年、仏教文学研究会ができて、そこで取りあげられはじめているが、日本仏教の教理なり思想を研究する専門の仏教学者のほうで、『源氏物語』を仏教文献と同じ扱いのもとに研究資料とすることは、いままで見られない。しかし、その『源氏物語』に、たびたび仏教に関係したことが取りあげられており、したがって、『源氏物語』や、その他の文芸作品を正統な仏教文献と一緒にして、仏教学者が仏教の側から研究していく必要がある。

そこで問題となるのは、本居宣長の『源氏物語』にたいする評釈の仕方である。評釈書の『玉の小櫛』（一七九九）において、宣長は、物語を貫くものは「物のあはれ」であり、それにたいして、仏教は「物のあはれ」などの情を否定し、人生を超越する、きびしい教えであって、したがって、仏教思想を通して物語を見ることは誤りだと評した。かつて、紫式部が天台の学者であったことも手伝って、『源氏物語』は天台三大部の小説化であるという説が生まれ、ついには、天台三大部と巻数を合わせるということさえなされた。『源氏物語』六十巻説が、

それである。本居宣長は、そのような説にたいして、大いに反発を感じたのである。

『源氏物語』には、実際に仏教が影響しており、仏教を排除しようとする評釈には無理があるといわねばならぬ。ただ検討すべき問題は、どのような変容のもとに仏教が日本化し、『源氏物語』に取りこまれたかということである。たとえば、『源氏物語』に「宿世」ということばが一二〇回も出ているが、法華経に見られる「宿世」の語や『俱舍論』に説かれる「宿業」の觀念などとの同異が問われてくる。全般的にいえば、『俱舍論』の宿業説は現世における努力によって宿業の転換が可能であるとしたのたいし、日本に入ってくると、前世に重心が移り、宿命論的な固定化の傾向が見られるようになる。その点、『源氏物語』も同様といえよう。ともあれ、仏教の日本化にさいして、業の問題は考察すべき恰好の材料となるものである。

以上をまとめれば、日本仏教の新たな研究方法は思想的ないし思想的な研究と学際的研究ということになる。それが可能なためには、仏教内外の垣根をほらい、諸宗

派・諸分野の研究者が手を携えて協力しあうことが必要であり、個々の研究者についていえば、客観的にして主体的な思考作業が要求されよう。

(たむらよしろう・立正大学教授)